# 水試の何でも魚ッチング

## No.65『ここまでわかった！アンコウのこと』

鍋料理が恋しいこの季節、寒ダラにバトンタッチするまでの主役はアンコウですね。濃厚な肝、ツルットロッの皮、ふんわりした身、想像しただけでよだれが出ます。

山形県でも平成の時代になってから漁獲量が100トンを超え、すっかり顔馴染みとなりましたが、産卵期や成長といった基本的な生態すらわかっていない謎だらけの魚でもあります。10年位前、漁師さんに「売り物にならない手のひらくらいのアンコウがたくさん獲れるんだけど、どの位したら水揚げできる大きさになるのか？」と問われ、資料を調べてみましたが当時はわかりませんでした。

水試では平成16年から底魚の稚魚調査に取り組んでおり、その中で"謎の魚"アンコウのことも大分わかってきたので紹介します。

### アンコウの成長と漁獲

アンコウの卵はカエルの卵のようにゼラチン質に包まれ、吹き流しのような筒型で海中を漂いながらふ化します。本県での産卵期は、2月頃から接岸し、5月頃に盛期を迎えると思われます。写真1は今年の5月に最上丸で獲った8キロのメスです。腹の中にはビロビロした卵がぎっしり！その重さは体重の半分4キロもあり、卵数は62万個でした。これは卵が多い方ですが、ふつうでも体重の3～4割はあるようです。

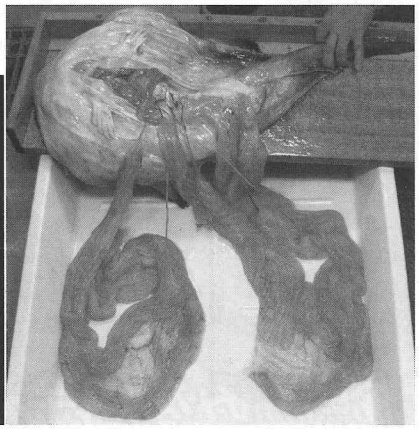

写真1　アンコウの卵巣

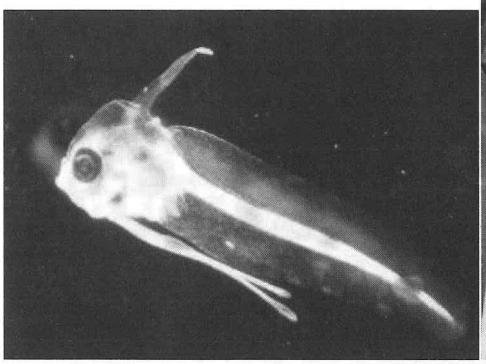

写真2　ふ化したてのアンコウ

生まれたばかりの赤ちゃんは写真2のようにヒレが大きく、フワフワ漂いながら数十日を過ごし、やがて親と同じ体つきになって海底生活に移ります。このときの体長は5センチ程度です。本県では5月頃から海底に定住し始めるようです。その後、10月には12センチ、翌年5月には20センチ、そして9月には30センチ、0.5キロとなって、ようやく漁師さんの水揚げ対象になります。つまり、生まれてから1才半で荷受サイズに達する、かなり成長の良い魚といえるでしょう。その後、2才で1.5キロになり、寿命は10年以上とされています。

平成19年5月に加茂沖で標識放流した20センチのアンコウが同年12月、鼠ヶ関沖で31センチ0.6キロになって再捕されました。ご報告いただいた底びき船の清徳丸さん、大変ありがとうございました。

### さて、どうしましょう？

小型魚保護のため、あら場で使用する目合を1寸7分以上に拡大する包括的資源回復計画が実施されていますが、アンコウの稚魚はこの目合でも漁獲されてしまいます。また、アンコウは皮膚が弱く、網で傷ついた魚の多くは生きていけないので、再放流も効果的とはいえません。私も傷が少ない魚を飼育してみましたが、皮膚が化膿したように赤くむくれて死んでしまいました。

最上丸の試験操業では、底びき網で漁獲したアンコウの半数以上が荷受サイズ以下だったので、かなりの資源が"無駄遣い"されていると考えられます。この目合拡大でも再放流でも保護できない小さいアンコウと、これからどの様に付き合っていくか、漁業者の皆さんと一緒に考えていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

水産試験場　阿部　信彦

● みんなの元気と健康を支える　JF共済